

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	異文化コミュニケーション研究科	異文化コミュニケーション専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士前期課程 2年	荻原 まき 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 教授	小山 亘 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題名	「台湾原住民族が語る記憶の中の日本語—ダイクシスに注目して—」		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士前期課程 2年	荻原 まき	
研究期間	2013 年度		
研究経費	(支出金額) 146 千円 / (採択金額) 173 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

現在の台湾における台湾原住民族の日本語の語りが研究の中心である。インタビューを通し、日本語の語りの中で、当時の「過去」の記憶から見える「今ここ」、または「今ここ」から語られる「過去」を、記号論の概念である指標性（ダイクシス）と類像性（反復、引用）、そしてそれに伴うジェスチャーに注目し分析した。

戦後約 70 年経った現在においていまだ語られる日本語であるが、「今ここ」で、日本人の私に対して語る際、何を語るのか、どのように語るのか。彼らの歴史的、民族的、言語的背景もあわせ、考えることにより、「今ここ」と「過去」を繋いでいる彼らの「記憶」と「日本語」の関係を紐解くこととなり、記憶と言語に焦点を据えたナラティブ研究の一環をなすといえる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[台湾原住民族] [語り (ナラティブ)] [記号論]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 研究背景

台湾はかつて様々な国に支配された歴史を持つ。中でも 1895 年から 1945 年の日本当時時代、そしてその後の中国国民党時代に焦点を当てた。当時、台湾には閩南人、客家人、原住民族がおり、言語もそれぞれ違っていた。原住民族は 9 部族おり、それぞれが部族語を話し、コミュニケーションがとりにくい状態であった。しかし日本統治時代の「内地延長主義」政策のため、台湾においても日本同様インフラ整備等がなされ、加えて言語政策も行われた。その言語政策により、リンガフランカとしての日本語が使用され、現在 80 歳前後の高齢者は日本語を話すことができる。特に原住民族は「高砂族」として日本軍と共に戦った経験を持つ。そのことにより、日本の降伏後に来た中国国民党政権時代には、2・28 事件、白色テロと、いたましい出来事が起きている。その後戒厳令により、自由が奪われることとなる。大学で日本語の授業が開始されたのは 1990 年代になってからのことであり、約 70 年前の歴史が、今この現在においてもなお続いていることが窺えた。

2. 先行研究

当時「高砂族」として日本軍と共に戦った原住民族に注目した。まずその言語背景から、原住民族の日本語に注目した研究は多々ある。しかし日本語の文法、日本語の変容等に注目した研究が多く、その語り＝言語実践に注目した研究はあまり見当たらなかった。語り(ナラティブ)は相互行為としてとらえ、インタビューする者、される者、またそれを取り巻く環境すべてが関係していると考える。語りの研究も多々ある。しかし「何を語るのか」は明らかにされているが、「どのように語るのか」については十分に明らかにされていない状態である。そこで、「何を語るのか」、「どのように語るのか」の両方の視点から分析できる記号論的概念が必要であると考えた。特にその中の概念である、指標性と類像性に注目し、分析した。指標性では指示詞、代名詞等を表すダイクシス、類像性では「今ここ」にないものを前景化する反復、引用に注目した。加えて、「どのように語るのか」に必要であると思われるジェスチャーも同時に分析を行った。特にダイクシスと共に表れる指差し行為、また類像性を表すアイコンニックなジェスチャーがそうである。

3. データ

2013 年 8 月に実際に台湾へ赴き、原住民族(魯凱族の A、鄒族の B、鄒族の C)にインタビューを行った。それぞれ約 1 時間ほどのインタビューであり、当時(幼少時代)のことを語っていただいた。A はすでにインタビューを行っており、今回はライフストーリー的なインタビューとなった。B、C とは初対面で、B の父は中国国民党に父親を殺された経験を持っていた。C は日本軍と共に戦った経験を持つ原住民であった。

4. 分析と考察

A、B、C それぞれのインタビューから 1~2 分ほどの談話を取り出し、「何を語るのか」、「どのように語るのか」という点に注目し、記号論的概念で分析を行った。

A は 2012 年の 12 月に一度インタビューを行っており、ラポール構築もできていたため、今回のインタビューも滞りなく行えた。特に以前インタビューした内容を補完するように、ライフストーリー的なインタビューを試み、当時の歴史的背景に加え、A の人生の背景もあわせた分析を行った。その結果、当時子供であった A は、本当に勉強がしたく、希望にあふれていたわけであるが、降伏という出来事を境にその人生が変わり、進学之道も閉ざされてしまった。それがミクロ的分析である談話分析で明らかになった。ダイクシス、反復、引用等で、「過去」が「今ここ」で前景化され、「今ここ」と「過去」が繋がっている、或いは重なっていることが窺えた。またライフストーリーも併せて考察すると、日本降伏での人生の変化がずっと尾を引き、師範大学の進学失敗、郷長選挙不出馬にも影響が及んでいたことが窺えた。しかし、A はキリスト教を信仰し、自ら牧師にもなり、また人生が一変する。キリスト教に入ってから、部族の代表にもなり、子どもたちに魯凱語も教え、A の人生を良い方向に変えたものであった。つまり、日本降伏でなしえなかったことが、キリスト教入信により実現され、それが「今ここ」にも繋がっていることが明らかとなった。つまり、談話分析、ライフストーリー両方において、「今ここ」と「過去」が重なっていることが考察された。

B は初めてのインタビューであったが、非常に穏やかにインタビューが行えた。B は幼少期、日本人の家に住むことができるほど部族でも高い地位にいた原住民である。父親は部族のリーダー的存在であった。また日本人の養子となり、巡査をしていた。しかしそのことが日本降伏後の中国国民党時代に仇となり、B の父親は殺されてしまう。そのような背景を持つ B である。まず幼少期の様子を聞いた際、戦争から帰ってきた帰還兵のことをよく覚えており、

研究成果の概要 つづき

語っていただけた。特に帰還兵の話である。ほとんどが亡くなり、戻ってこられなかったため、帰ってくる事ができた兵を迎える家族の様子は感慨深く、B 自身も泣きながら語っていた。その際、帰還兵の言葉を引用し、またジェスチャーも頻繁であり、「今ここ」において「過去」の様子がよく窺えた。その後 B は父親が殺されたことをきっかけに、キリスト教に入信している。キリスト教の精神で「どこの国の人でもみんな平和にならなければならない」と語っていた。しかし、これは「何を語るのか」という言及指示内容においてである。B が所属しているキリスト教の教会は、台湾人中心の教会であり、本省人(戦後の大陸から渡ってきた中国人)がいない教会である。使用する言語も閩南語であることから、このような社会指標的背景を併せると、「みんな平和に」と言いながらも、B にとって父親のことは、いまだ終わっていないことであることが指標された。それは日本降伏という出来事が、B には父親の死と繋がること、いまだ終わっていないことであることが窺えた。つまり、その語りのみを分析することは本当の分析とは言えないことであることも示唆された。B はこの出来事を文字化しており、現在もその活動を続けている。B にとっても「過去」のことは「過去」のことではなく、「今ここ」に繋がるものであることが考察された。

C は日本軍と共に戦った経験をもつ原住民である。インタビューにおいてもその戦いの様子を語っていただけた。C の談話を分析した際、当時の焼け野原の様子を「自己引用」を用いて語っていたのだが、その自己引用を用いる際、体の向きを変えていることが窺えた。「今ここ」のことを語るときには私の方を向き、「過去」のことを話す時には私と反対の方向を向いていた。つまり、C にとって、「今ここ」と「過去」は身体化されているものであった。また、「過去」の語りの中に、さらに「過去」が埋め込まれていることが、ダイクシスにより明らかになった。自己引用の中に「過去」があり、それが「今ここ」において前景化されている、つまり、「今ここ」と「過去」が重なり合っていることが考察された。また、C にとっての日本軍とは、その語りから「規律」、「厳しい」というものであったことが窺えた。しかしその「規律」は良いものであり、日本降伏後もその「規律」を信じ働き、会社を立ち上げ、「今ここ」の現在においてもその会社が存続していることが明らかになった。C も A、B 同様、キリスト教に入信していた。

以上、A、B、C の分析をまとめると、彼らの語り—「何を語るのか」、「どのように語るのか」という点から、「今ここ」と「過去」は二項対立するものではなく、連続しているもの、繋がっているもの、重なり合っているものということが考察された。日本降伏という歴史的な大きな出来事により、彼らを初めとする原住民族の人生が大きく変化し、また歴史的出来事に翻弄されたことは共通して見られたことであった。またインタビュー前にはわからなかったこととして、原住民族とキリスト教の関係があげられる。この 3 人以外の原住民族もほとんどがキリスト教に入信していた。かれらをキリスト教という信仰に向けさせたのはどのような力、環境だったのであろうか。どれほど大きなものだったのであろうか。これは今後の課題として研究を続けていきたい一つのテーマとなった。また、今回は日本人女性による、日本語を用いたインタビューであり、協力者も日本語での語りであった。しかしこれも、中国語であったら、また原住民語であったらおそらく違った語りが見られることであろう。特に歴史的背景を踏まえると、日本語でしか語れないこと、或いは日本語では語れないことがあったと思われる。このことはまた、彼らのアイデンティティの所在にも関係すると思われる。「台湾人」、「原住民族」等の大きな枠組みでのアイデンティティではなく、1 分程度の談話にも現れる、アイデンティティの揺らぎのようなものも窺えた。これもあわせ、今後の一つの課題として、引き続き研究を深めていきたい。

5. 学会発表

以上の分析の一部を、「談話行動研究会 (JACET)」と、「社会言語科学会 (JASS)」において口頭発表を行った。「談話行動研究会」では 40 分間の研究発表に加え、20 分間の質疑応答がなされ、貴重なご意見をいただくことができた。分析において足りないところ、違った視点での分析等、非常にためになるご意見がいただけた。それを踏まえ、反映させ、次の「社会言語科学会」の 20 分間の口頭発表においては、まとまった発表をすることができた。こちらでも 10 分の質疑応答で、たくさんのご意見、コメント、ねぎらいの言葉をいただけた。この二つの口頭発表は、私自身の研究のまとめにもなり、また不十分な点等が明らかになった、有意義な口頭発表であった。これからもさらに研究を深め、より良い発表を続けていく所存である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① なし

② なし

③ なし

④ その他 (研究会・学会発表)

1・2013年3月1日(土) 談話行動研究会(JACET) 研究発表会 口頭発表
於: 立教大学

2・2013年3月15日(土) 社会言語科学会(JASS) 学会発表 口頭発表
於: 神田外語大学